

## 年少組

### 「色と出会おう！色と色が混ざり合うとどんな色になるのかな？」

～新たな色・予想せぬ色と出会う幼児たちの驚き・喜びを大切にしたい探究活動～

年少組

こいぬ組 19名 (男児7名・女児12名) 教諭A 11年目・教諭B 4年目

うさぎ組 19名 (男児6名・女児13名) 教諭C 12年目・教諭D 18年目

年少組では、「色と色の混ざり合いにおける幼児の探究活動やその展開」に取り組むにあたり、その前段階として、以下のような経験につながるよう意識をしながら働きかけをしていくこととしました。

#### 【年少組のすくわくプログラム以前1～2学期の活動展開】

色と色が混ざることによって・・・

- 1) 元の色と違う色になることを楽しむ
- 2) いろいろな色との出会いを楽しむ

6月「マーカーのにじみ絵（製作→てるてるぼうず）」こいぬ組

7月「フィンガーペイント（壁面→海のイメージ）」各クラス



10月「好きな3色を混ぜてフィンガーペイント（壁面→芸術の秋）」うさぎ組



10月「ウェットティッシュでにじみ絵（製作→アイス屋さんごっこ）」うさぎ組  
幼稚園祭内の「お店屋さんごっこ」の活動において、うさぎ組ではさまざまな色を使用する可能性がある「アイス屋さん」を選択しました。

その取り組みの中でにじみ絵の技法を取り入れ、幼児たちと色と色がにじみ合い、混ざり合っていていく色を楽しみました。また、その一枚一枚の色から「〇〇味」と味を連想したり、見立てたりと、おいしそうに完成した自分のアイスの色（味）に満足していました。



学年では、1～2学期の経験活動から「色と色を混ぜると違う色ができる」、という気づきがあったことを踏まえ、さらに下記のような経験ができるよう、環境を整え、働きかけをしていくこととしました。

#### 【年少組のすくわくプログラム活動展開予定】

色と色が混ざること・・・

- 1) 新たな色との出会いや発見を楽しむ
- 2) 色が変わることを想像したり、楽しんだりする
- 3) 予想せぬ色との出会いに驚いたり、喜んだりする

#### 2月5日「赤・青・黄（三原色）の色水あそび」各クラス

赤・青・黄の三原色の色水をペットボトルと透明のカップを用意し、その中で、好きな2色を混ぜる → 3色を混ぜる → 自由に混ぜる、という段階を踏みながら色混ぜ



を楽しみました。

実際にやってみることで、「〇色と〇色を混ぜると〇〇色になる」という気づきがたくさんありました。

・同じ色の組み合わせでも「濃淡」が違うことにも気づき、全部混ぜ合わせると「きれいな色」になると思った幼児たちが、「黒や茶色」になったことに驚いていました。（こいぬ組）

・不思議な色ができた幼児が「すごい色」と表現したため、「何みたいな色？」と聞いてみると、「バナナをずっと置きちやっ  
てブニュブニュってなった色かな」と自分なりに考えて答えていました。その姿から、自分の作った色に名前をつけてみよう



と全体に働きかけたところ、「お茶色」「おにぎりの海苔色」など、それぞれの感性でネーミングをし、それらの色への親しみを強めていました。また、「〇〇色ができた!」「どうやって作ったの?」「〇色と〇色を入れるんだよ!」と友達の作った色に興味をもったり、共有したりしていました。最後には、クラスで様々な気づきを発表し、みんなで共有し合いました。（うさぎ組）

【振り返り】何色になるかを実際に試していく中で、予想したり考えたりしながら、想像通りの変色への喜び、同じ色の濃淡の違いへの気づき、混ぜれば混ぜるほどきれいになる予想からは程遠い予期しない色への変化への驚きなど、たくさんの学びがあった。また、色を混ぜると違う色ができる、色は作ることができる、ということを知った幼児たちは「〇〇色はどうやって作るんだろう?」という気持ちを高めていた。

## 2月10日「ゆびえのぐ（9色）での色混ぜあそび」各クラス

9色のゆびえのぐ「赤、青、黄色、オレンジ、黄緑、緑、青、紫、白」から、好きな1色を手のひらにのばす → 2色目を選んで混ぜる → 友達の手ひらの色と混ぜ合う → さらに違う色の友達と混ぜ合う、と段階を踏みながら、できた色を画用紙にスタンプをしました。その中で、前回の色水遊びでは作れなかった色に興味をもったり、気づいたりできるよう働きかけていきました。

1色目ではゆびえのぐの冷たい感触を楽しみながら、両手を擦り合わせてのばした後、2色目の後の展開として計画はしていたのですが、幼児たちから自発的に「友達の手と合わせたら何色になるか、やってみたい」という探求の声があがり、ふれあいを楽しみながら、その混ぜ合わせによる色の変化に気づき驚いたり、喜んだりしていました。



・それぞれ友達の色と混ぜ合わせると、元のゆびえのぐにない色（混ぜないとできない色）ができたことに、満足感を味わっていました。また、最初の色から画用紙にスタンプした色を順に見比べて色を混ぜて起きた変化に気づいたり、自分の作った色に名前をつけて親しみを感じたりする様子もありました。（こいぬ組）



・今回もそれぞれの気づきや発見を発表し合う場をもちました。そこでは、「赤と白でピンク」「青と白で水色」という新たな色の作り方や、「濃いきみどりと白で薄いきみどり」という濃淡への気づきの共有が



できました。その中で、幼児から「色水ではピンクはできなかったのにね」という発言があり、「どうしてだろうね？」と問いかけると、「色水は白がないからかな」と自分なりに経験から考察していました。また、友達のいろいろな気づきからも刺激を

受け、「黒はどうやって作るのかな？」「白は？」と新たな好奇心や探究心が生まれました。（うさぎ組）

【振り返り】できた色を画用紙に残していきましたが、手のひらでは伸びの良いゆびえのぐでも次第に乾いていくと、水分が画用紙にうつっていくことで、色が残りにくいため実際の色の変化が紙面では残しにくいという問題点があった。

土橋先生より、ゆびえのぐの「水で溶かずにすぐに描ける」「紙の上では乾きやすい」などの性質を理解した上で、それらを活用することへの改善策と、幼児がつくり出した色をクラスで共有することへの評価とその方法への助言をいただいた。

また、幼児の混色に関する知識の差が大きいことについて、このような色混ぜあそびの中で、新たに発見をして積み上げていくことが、一人ひとりにあった成長へつながっていくことを享受していただき、学年の迷いが晴れた。

## 2月27日「ビニール上のフィンガーペイント（絵の具）を画用紙に転写」各クラス

土橋先生からの助言を踏まえ、机に敷いたビニールに絵の具（混ぜる色数は制限なし）でフィンガーペイントを楽しみ、最後に画用紙に転写する方法で行いました。

ビニールの上であるため、絵の具がのびやすく、乾きにくく、絵の具の感触や色混ぜをじっくり楽しむことができました。また、混ぜる絵の具の数を制限なく行ったた

め、次第に茶色っぽくなっていく様子もありました。その中で、「赤色が強い」など幼児たちなりの表現で、彩度や明度にも気づいていました。

【振り返り】一斉活動で行ったことで、転写の際に画用紙を上置いてからはがすまでに時間が経ち、絵の具が乾いたことで、画用紙とビニールが貼りついてと



れなくなってしまった。それは、教師としては大きな反省点、だが幼児たちも「絵の具は乾く」、「乾くと紙と貼りつく」ことに気づいた。

土橋先生より、教師が失敗と思うことも、幼児の視点では発見なのだという、考えてもみなかった助言をいただき、それをすぐに実践し、今回の「発見」を幼児たちと共有し合っていくことができた。

### 3月10日「厚紙ボードにフィンガーペイント（絵の具3色）」各クラス

絵の具11色「赤、青、黄色、オレンジ、黄緑、緑、青、紫、白、ピンク、水色」を用意し、前回の反省をふまえ、数人ずつ、色の分量、絵の具を置く場所、混ぜる順番など一人ひとりの思いを生かしながら行っていました。

3色選ぶ際には、好きな色を選ぶ幼児もいれば、「〇〇色っぽくしたい」という思いをもち、これまでの色混ぜの経験での学びを生かしながら色を選ぶ幼児もいました。

・絵の具の感触や混ぜていく様子を見て、色の濃淡の変化に気づいたり、友達と同じ色の組み合わせでも、混ぜ方や色の量によって、画用紙上に残る色が薄かったり濃かったり、違いがあることに気づいたりしていました。（こいぬ組）

・手のひらで混ぜるだけでなく、指先、爪など様々な部分をつかえるよう働きかけると実践し、特に爪でひっかくと、最初に広げた色が出てくることに気づき、繰り返し楽しんでいました。また、後日、作品を保育室に掲示したところ、保育者の問いかけにより、様々なことに目を向け、色が混ざりきっている部分と、元の色が残っている



部分に気づいたり、友達のつくった色と見比べ、同じ3色を使っているにもかかわらず、それぞれの絵の具の分量によって色味が違うことに気づいたりしていました。（うさぎ組）

【振り返り】土橋先生より、紙 → ビニール → 厚紙ボード、教師自身もどんな素材が適しているのかと探求しながら幼児に提示していった結果、紙よりも水分を吸わないツルツルとした素材の枠内で、絵の具の厚みを感じながら、「色をつくる楽しさ」を味わえたことへの評価と、「自分で色を調整できるようになることにつながる気づき」から進級後の学年への展望を示していただいた。

すくわくプログラムを通して、色混ぜを楽しみながら、新たな色の発見、濃淡、明度、彩度など幼児たちなりに気づくことができました。また、考えたり実践してみたりすることでの多くの気づき、学びのある活動となり、好奇心や探究心を育むことができたように思います。中でも驚いたのが、年少児でも、自ら友達と気づきを教え合ったり、共有しようとしたりする姿があったことです。今回の取り組みでの気づきや発見、さらなる疑問などをこれからに活かしていってくれることを期待しています。

終わりに、白百合女子大学准教授 土橋久美子先生に教育活動を参観、評価、助言をいただいたことが、教師にとっても、新たな取り組みの仕方などを知るとともに、教材研究の大切さを改めて学ぶ経験となりました。